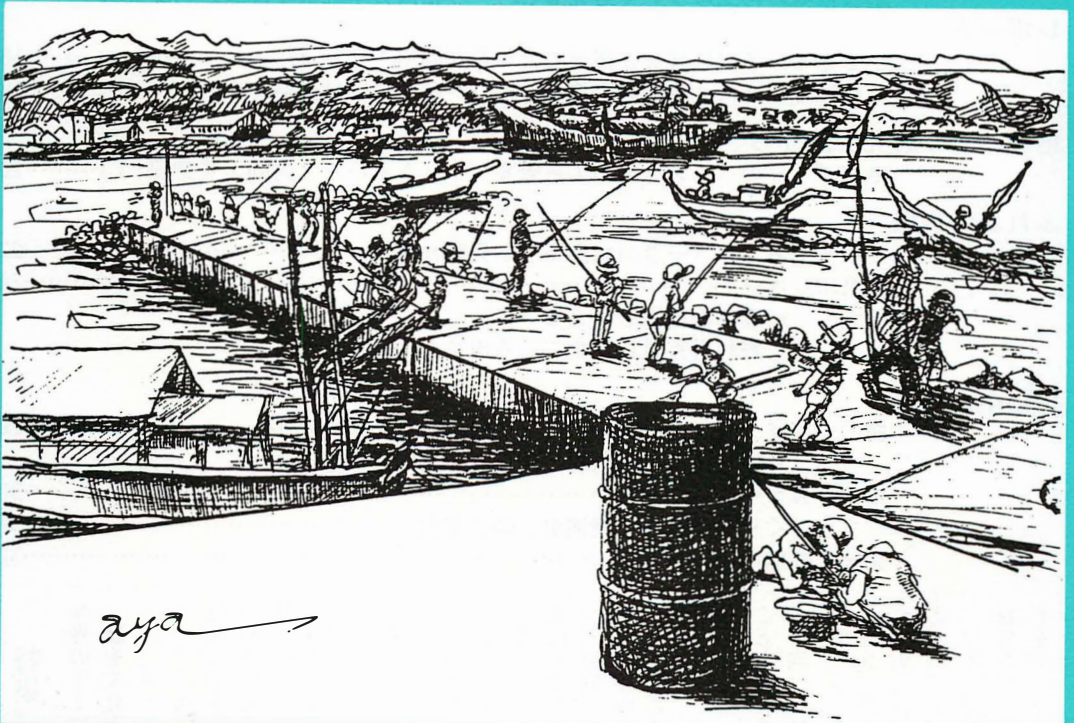


まちづくりネットワークえひめ

舞 とうん

VOL 30



北条沖 鹿島

特 暮らしと文化 集

『歴史文化とまちづくり』

- 歴史と文化を礎に
- 龍馬で村おこし
- 古墳の里でまちづくり
- 別子銅山が観光地として甦る
- 「能島水軍の里」のまちづくり

アングル

転勤族の舞たうん.....N T T 四国支社長／千葉正人..... 3

特 暮らしと文化 集

『歴史文化とまちづくり』

歴史と文化を礎に.....宇和町／末光安雄..... 4
 龍馬で村おこし.....河辺村／梅木良照..... 6
 古墳の里でまちづくり.....朝倉村／白石春雄..... 8
 別子銅山が観光地として甦る.....新居浜市／高橋利光.....10
 「能島水軍の里」のまちづくり.....宮窪町／高橋万寿男.....12

論談—まちづくり—

過疎地域の再生について考える (I).....松山大学経済学部長／村上克美.....14

レポート

ふるさとに子供は残るか残せるか～第10回逆手塾レポート～.....16
 「自然を味方に」早川町のまちづくり～県外先進地研修レポート～.....18

地域づくり研究会議から

地域づくりのベースを求めて—管見スイスを歩いた2週間／見想録 (I).....20

ふれあい広場

リレーでちょっとトーク (北条市・広見町から)22
 元気印レポート.....24
 < 離島振興法を考える >
 < 野村町百姓百品まごころ市がんばっちょります >

Information

媛のくにフラッシュ.....28
 < 新居浜市・面河村・肱川町・愛媛県 >
 T W O N タウン通信.....30
 「まちづくり草の根文化講演会」のご案内.....31
 完全土曜閉庁のお知らせ.....32

特集「暮らしと文化」

今号のテーマ

「歴史文化とまちづくり」

「文化」とは？広辞苑を広げてみるとこう書かれています。『人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住を初め技術、学問、芸術、道徳、宗教、政治など生活形式の様式と内容を含む』何とも抽象的である。もっと判りやすく言くと、私たちの生活様式そのものが文化であり、私たちの毎日の生活、毎日の営みこそが文化であると言えると思います。

そういった身の回りにあるものを文化と感じられる心を育み、しっかりと自分の足元を見つめられる目を養うことから、まちづくりはスタートするのではないかと思います。

「舞たうん」では、今号から「暮らしと文化」をテーマに特集を組むことと致しました。その第一弾として今回は「歴史文化とまちづくり」と題して、地域に根ざした歴史文化をうまく活かしながら、まちづくりを進められている五名の実践者の方々にご登場願いました。

さあ、見つめ直して見ませんか？自分たちの地域を。自分たちの暮らしを。

表紙のこぼれ

梅雨の晴れ間に誘われて、北条の鹿島に来た。暑い日差しの中、無防備な姿にスケッチブック片手である。

釣客が多い中、昔と違って目に写るのはカップルやヤンググループの釣姿。今日のファッションである。

最近、食卓メニューから魚の姿が消えつつ、レジャーとして若者に侵入してきた。

柳原あやこ





私は今、NTTに勤めています。愛媛県内には五つの支店と十
三の営業所があり、夫々の地域で環境クリン作戦など、社員による地域ボランティア活動も盛んに行われていて、一定の評価も頂いております。しかしここでは、これら職域を通じてのまちづくりの話ではなく、私個人として、松山に住んで丁度一年たった転勤族の一人として、まちづくりに関する所感を綴ってみました。

私の住まいは、松山市の岩崎町にあり、健康維持のため、早朝四十分ほど早足の散歩をしています。①道後公園、伊佐爾波神社、宝蔵寺、温泉本館、若しくは、②石手寺、美安寺が散歩の経路になります。

①の経路では、まず道後公園内の湯築城址の発掘調査が興味を引きます。遺跡をうまく取り込んだ土地の利用が待たれるところですが、公園は四季折々の花や緑が美しく、清掃もほぼ行き届いています。波神社では、冬の朝、石段の下に野良犬が群れ、通りがかりのご婦人がエサをやるうとしてるところにうっかり立ち入ったところ、一匹の犬に後から右足をがぶりとやられてしまいました。大好きな私も、これには驚き、かつ危険を感じました。観光客だったらどうしましょう。温泉本館は、今、ツバメのお宿にもなっていて、ヒナが忙しくさえずり、楽しい眺めです。



②の経路では、石手寺への道が、表通りも裏通りも、すべて水の流に沿っている楽しさがあります。溝、小川、用水、放水路、堀。コンコンと流れるきれいな水は、見ているだけですべてを忘れさせ、心を空っぽにしてくれます。さてここでも、流れに捨てられた空きカンやプラスチックのゴミが悲しい存在です。家によっては、その前の流れをきれいにしているところもあります。私もいつか、黒いゴミ袋を携え、空きカンを拾って歩こうと思っています。

石手寺はすばらしいお寺です。仁王門、三重の塔、阿弥陀堂、本堂。心が安らぎます。私の、四国霊場八十八カ所参拝も、去年松山に来た翌月から、この石手寺から始めたのでした。野良犬、野良猫

のことは触れませんが野良のニワトリ（ただしオスばかり）には驚き、かつ楽しくなりました。一点だけ敢えて書けば、阿弥陀堂の裏手から水子地藏のある一帯にかけてのゴミの問題です。広い境内だけに掃除も大変なのでしょうが、自然の落葉以外に、観光客の残して行くゴミや古くなって納められた御札などの処理は、何とかならないものでしょうか。公募の奉仕日があれば、私も手伝いさせて頂きます。いずれにせよ、ゴミの問題は、結局は一人ひとりの意識と行動に帰結することなのでしょう。

以上、無責任な一転勤族の放談を綴りました。関係の方にご迷惑をかけることがありましたら、伏してお詫び申し上げます。美しい舞たうんの実現を願うての勇み足と、どうぞお許し下さい。

歴史と文化を礎に

宇和町役場

末光 安雄

■文化の里宇和町■

宇和町を表現するとき「文化の里宇和町」という言葉がよく使われる。このことは、昭和四十八年宇和町が「文化の里」の選定を受けたことによるものでもあるが、

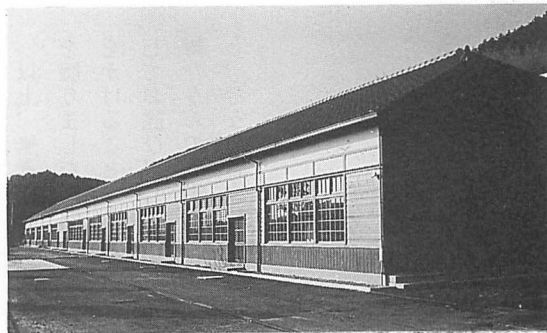
宇和町には明治初期の私塾「申義堂」や「開明学校」があり、その後町民が学業にいそしんだ「旧宇和町小学校の校舎」（大正・昭和初期建築）が、近年移築保存されている。そして平成に入っては現在の近代的校舎が建築されるなど、町内に明治から平成にかけての学校群が残され、今なお教育施設として活用されていることは全国的に希であり、このことがまた物的には何よりもそれを証明するものであると思われる。なお、この諸施設の中には、開明学校で展示保管している明治期以降の学校教育資料である掛図や教科書等、これまた全国有数のものであると、その筋からも折り紙がつけられており、これらの学び舎から巣立った者の中には、白井雨山（彫刻家）片山万年（書家）等のように、全国に名を馳せた人々も多く輩出している。

歴史の面では、町内から縄文・

弥生両時代の土器類や銅銚、銅剣等を多く出土しており、百六十余基にも及ぶと思われる古墳群や、その他戦国時代を偲ぶことのできる居城跡があり、昔から南予の交通の要所として拓かれた宿場町が、立派な用材と技術のもとで今もなお残されている。そして蘭学者二宮敬作や日本初の女医楠本イネが住んでいた土地であり、幕末の志士高野長英が身を隠した地であることなどが文献等によって残されていることは、宇和の地が名実ともに歴史と文化に裏打ちされた町であることを物語るものである。

■文化を守る■

このように自他共に認める宇和の文化を、現代に生きる我々がどのようにして守り後世に残してゆかかということは、われわれが自分の命を守ることに次いで大切なことである。



旧宇和町小学校保存校舎
(米博物館はこの校舎を利用しています)

守るということについては、物質的な面と精神的な面があるように思われる。物質的な面では、公の資産であるものと個人の所有のものがある。老朽化してゆく物の場合では、個人の所有者もある程度の限界までは個人の宝としてばかりでなく、社会の宝として考えて、最善の努力をしていただく必要がある。しかし物事には限界があり、社会の宝として考える場合、やはり公の理解や援助が不可欠である。行政がどのようにしてこの地方の歴史や文化を守るかという指針を示すことが大切である。物に対して勝るとも劣らない精

神の問題。文化を語るのならばこの方がむしろ優先されるべきではないだろうか。文化を尊ぶ心なくして、文化の継承も発展もあり得ないのである。文化に対する高い価値観を持つ住民づくり、これにも住民相互の啓発活動と行政のアドバイスなど不断の努力が必要であり、文化的土壌の醸成が基本であることは言わずと知れたことである。

わが宇和町では、前述したように歴史ある文化財等の保護のために多くの努力をしているが、今年度に入ってから新しく文化の里区域内の中町の町並みについてどうするかということの検討をするため、調査研究の委員会を設け、改めて研究対処することになっている。

なお、本町において心強く思っていることは、町内有志の方々（五百四十名）によって(社)宇和郷土文化保存会の組織がもたれ、宇和町の文化財の保護のために有形無形のご支援を得ていることや、町内には十一の郷土芸能がありそ

れぞれに保存会が組織され、継承活動が行われていることは心強い。

■文化を創る■

古い歴史や文化を守るといふことに対して、今の時代に必要なのは、文化を創るといふことであると思われる。

飽食の時代、豊かさの時代といわれる現代、わたしたちは物のみ豊かであっては意味がないと思われる。人として心豊かに生きることが大切である。現代はハードの時代ではなくソフトの時代であると言われる。そこに住む人々が生甲斐を感じながら生きられるようにすることが、今は、行政に求められている。生涯学習、コミュニティづくり、健康づくりと行政に対して住民が文化面で期待することは大きい。

宇和町では、このたび愛媛県が歴史文化博物館を当町に建設されることになり、町民の間では「この歴史文化博物館の設置を今後どのようににより一層宇和町の発展に

結びつけてゆくか」ということが一大関心事となっている。来館者（来町者）に対し文化の里の名に恥じない町の施設を充実すること、そしてわれわれには文化を理解し啓発する心を育てることがより求められることである。

宇和町では今、文化の森整備構想を描き宇和町の充実に努力をしている。昨年の秋に竣工した町文化会館では講演とか各種発表会等の行事が持たれ、町民の文化の享受に大いに役立っている。施設が果たす「学び」「結び」「憩う」という機能をより高めるために、行政はこれらの施設の間立って、「継ぐ」ということに努めると共に、生甲斐づくりにより一層の財政的援助等が必要であると思われる。言い換えれば、住民が「文化の里」ということに理解と誇りを

持ち、豊かな人間性のある町民となり得ることができるよう、官民一体となった町づくりを進めることが必要である。



宇和町文化会館

龍馬で村おこし

河辺村役場

梅木良照



写シ

覚・関雄之助口供の事

三月二十六日四満川ヨリ

葦ヶ峠ニ至ル 信吾コレヨリ

引返ス

小屋村ヨリ榎ヶ峠―横通り

―封事ヶ峠―三杯谷―日除―

水ヶ峠ヲ経テ泉ヶ峠ニ至ル

龍馬俊平ト共ニ泊レリ

二十七日北表村ヨリ宿間村

ニ至ル 俊平コレヨリ引返ス

宿間村ヨリ金兵衛邸ニ至ル

マデ大洲城デノ経渉スルコト

七里半

金兵衛邸ヨリ三田尻マデニ

日ヲ要セリ

明治六年十一月十五日

自宅ニテ誌ス

高松 小埜

この写しが河辺村を大きく変えました。

昭和六十三年十一月十

二日、河辺村に衝撃的

事件発生……。

前日の十一日に発表さ

れ、十二日の愛媛新聞に

掲載された見出しに、

『大洲市の郷土史研究グ

ループ、龍馬脱藩ルート

を解明、新資料で「空白

の五日」確定』とある。

実に降って湧いた様な

衝撃的発表でした。

大見出しだけでは、そ

れほどの感激もありませ

んでしたが、小見出しに

(高知―野村―河辺―五

十崎―長浜―下関)とあ

り、河辺の活字を見つけ

た途端、これはと胸の高

まりを押えることが出来

ませんでした。



読み進むにつれて、河辺村の地名が、榎ヶ峠、横通り、封事ヶ峠、三杯谷、日除、水ヶ峠、泉ヶ峠と次から次と出て来るではありませんか。天にも昇るような、また、背筋の寒くなるような衝撃を受けました。

日本の英雄ここを通る。これは神様の引き合せか、ありがたや、ありがたや。

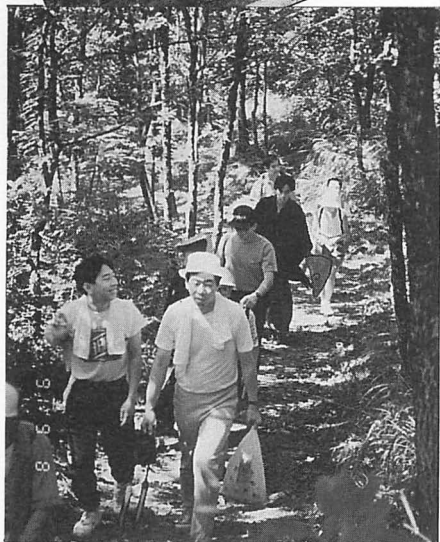
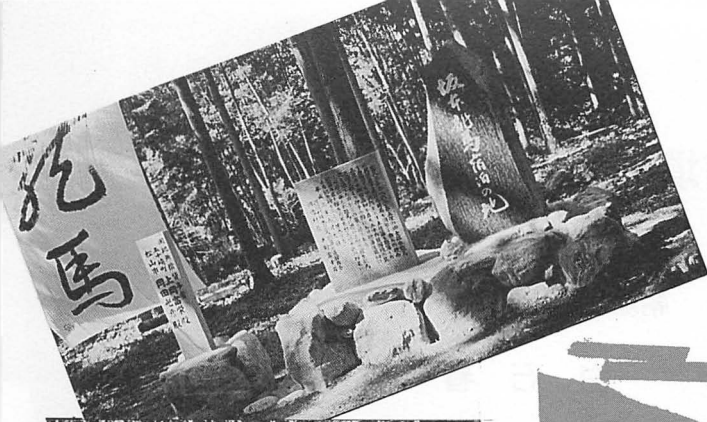
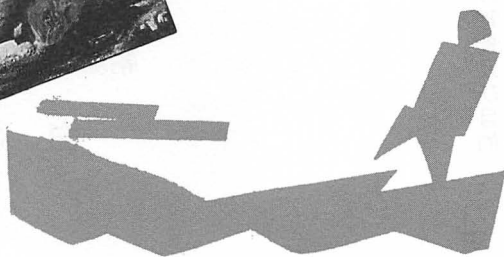
あの偉大な英雄坂本龍馬が、日本の曙に向かってこの河辺村を駆け抜けた。

寝ても覚めても龍馬の顔が浮かびました。

通過市町村が伊予の国に、野村町、河辺村、五十崎町、大洲市、長浜町と五ヶ市町村にまたがり、いずれの市町も河辺村より財政力



に勝る兄貴市町で、各市町がこの脱藩の道にどの様に反応されるか



気が気ではありませんでした。

ともかくにも、「関雄之助口供の事」の写しの中に、最も多く地名の出で来る本村としては、迅速な対応を図らねばとの思いで一杯でした。

未開発が幸いし、龍馬が脱藩したままの道が大部分残っていたことや、小まわりのさく小さい行政であったことがメリットとなり、長の決裁も、村民の賛同もすばやく得ることが出来ました。

以来、坂本龍馬脱藩の道保存会の設立、脱藩の道整備、道標の設置、記念碑の建立、休憩所、トイレの設置等を行なうとともに、イベント「龍馬を語る夕べ」「わらじで歩こう坂本龍馬脱藩の道」を

開催し、「龍馬は脱藩して大きくなる。河辺村は坂本龍馬で大きくなる」をキャッチフレーズに龍馬とともに歩んで来ました。

さすが坂本龍馬、テレビに新聞に雑誌にと、たびたび登場させて頂き全国の龍馬ファンが、この山村の地河辺村に結集することとなり河辺村の村づくりに大きく貢献をして頂きました。

村づくりに奮闘努力するなかで、イベントだけでも、溪流つり大会、ふるさと祭り、パーベキュー大会、三杯谷の滝まつり等を実施しておりますが、これらのイベントは、「沢山の人に来てくれて良かった」「まあまあ成功かなあ……」程度の感激しかなく、担当者はおかたづけ頃には、なんとなく白けてくるのが常です。

でも龍馬は違います。参加する人の目の輝きが違います。意気込みが違います。反響があります。ロマンがあります。そして余韻があります。

歴史上の人物坂本龍馬が成せる業でしょうか。

文化のない人に魅力なく、文化のない企業に繁栄がないのと同じく、文化のない村づくりは感動がない。

住民を感動させることが出来、来訪者を感動させることが出来たら、どんなにかすばらしい村になることだろう。

坂本龍馬脱藩の道は、河辺村にとって最もすばらしい村づくりの素材です。

龍馬の魅力には、勝てるすべもないが、「龍馬は脱藩して大きくなる。河辺村は坂本龍馬で大きくなる」を合い言葉に、これからも村民に来訪者に感動を与えることの出来る村づくりを目指します。

龍馬を語る夕べ、第四回わらじで歩こう坂本龍馬脱藩の道のイベントも、九月五日、六日開催と間近となって来ました。

また新しい龍馬ファンとの出会いを楽しみに、感動、感動、感動のドラマを演出したいと思います。

古墳の里でまちづくり

朝倉村役場

白石 春雄

又、樹の本古墳から出土した漢式鏡は、現在、東京国立博物館に珍藏されるなど、貴重なものが数多く出土している。

朝倉村の歴史は、古来より郷土史家や村内外にある古文書等によって、ある程度は明確にされているものの、実証するに至る資料や研究については、まだ不十分なところが数多く残っている。

朝倉村では、豊かな水と緑を生かした文化の里づくりをめざして村づくりが進められています。

緑のふるさと公園内に、自然環境、景観を活かして建設されたふるさと美術古墳館を生活文化の拠点として、郷土の歴史、文化を学び、貴重な文化遺産の調査、研究が進められ、文化財の保護とふるさとの再発見を通じ、新しい文化創造の糧として歴史遺産が活かされるのが、最も大切なことである。

▼計画の目標

▼計画の背景及び目的
朝倉村は、県下でも有数の埋蔵文化財包蔵地を有し、野々瀬古墳群や多伎の宮古墳群は、規模やその数において、多くの史跡が存在し古くから開けた地域である。

計画の背景及び目的を前提とし具体的な整備目標を明確にする。

- (一)古墳群保存整備
- (イ)野々瀬古墳群
- (ロ)多伎の宮古墳群
- (ハ)樹の本古墳群
- (ニ)野田古墳群
- (二)古墳文化の里整備
- (イ)古墳群及び文化財を結ぶサイクリングのコース整備
- (ロ)笠松山を中心とするハイキングコースの整備

▼整備計画

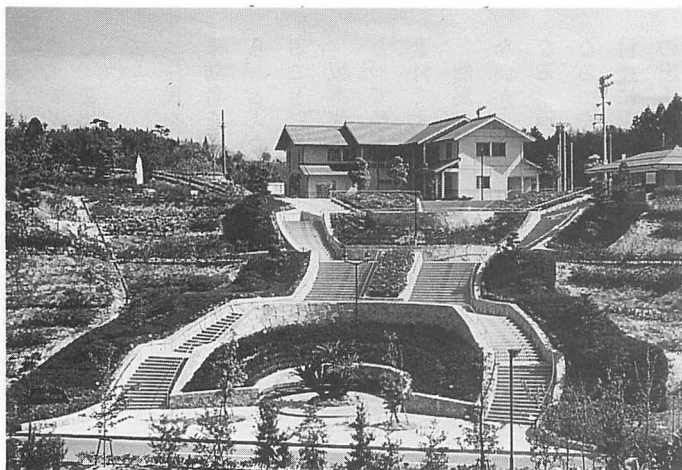
郷土の先人の歴史、文化を学び、新しい時代にふさわしい郷土の文化を創造するため、ふるさとの歴史、伝統、風土を正しく理解し、貴重な文化遺産を未来に正しく伝えると共に保存整備し、これら史跡ゾーンを結び、探索する史跡ルートを文化の里として整備を進めていく。

しかし、古墳又は文化遺産等は静かなイメージが強く、目的意識

がなければ、なかなか学べない要素をもっている。

利用しやすく、見る、触る、使うことよって興味を持てる施設とし、遊びながら学び、ふるさとの歴史を理解することの出来る施設づくりをしたい。

- (一)ふるさと案内板
- ふるさとの自然と歴史を紹介した案内板(ふるさと再発見)

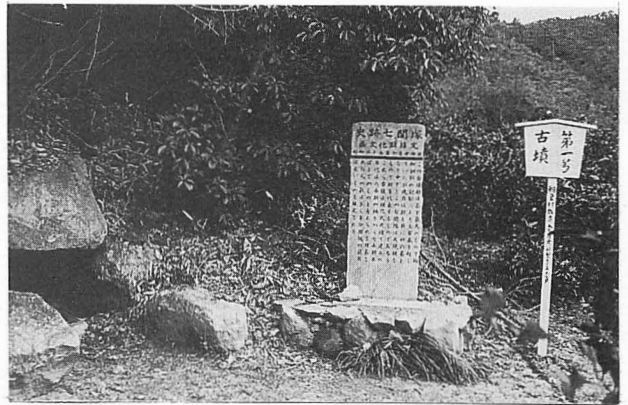
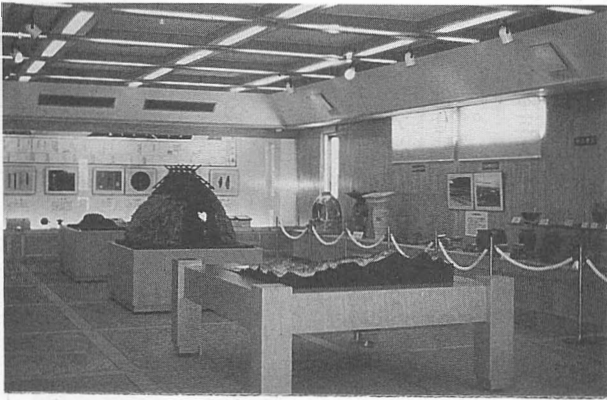




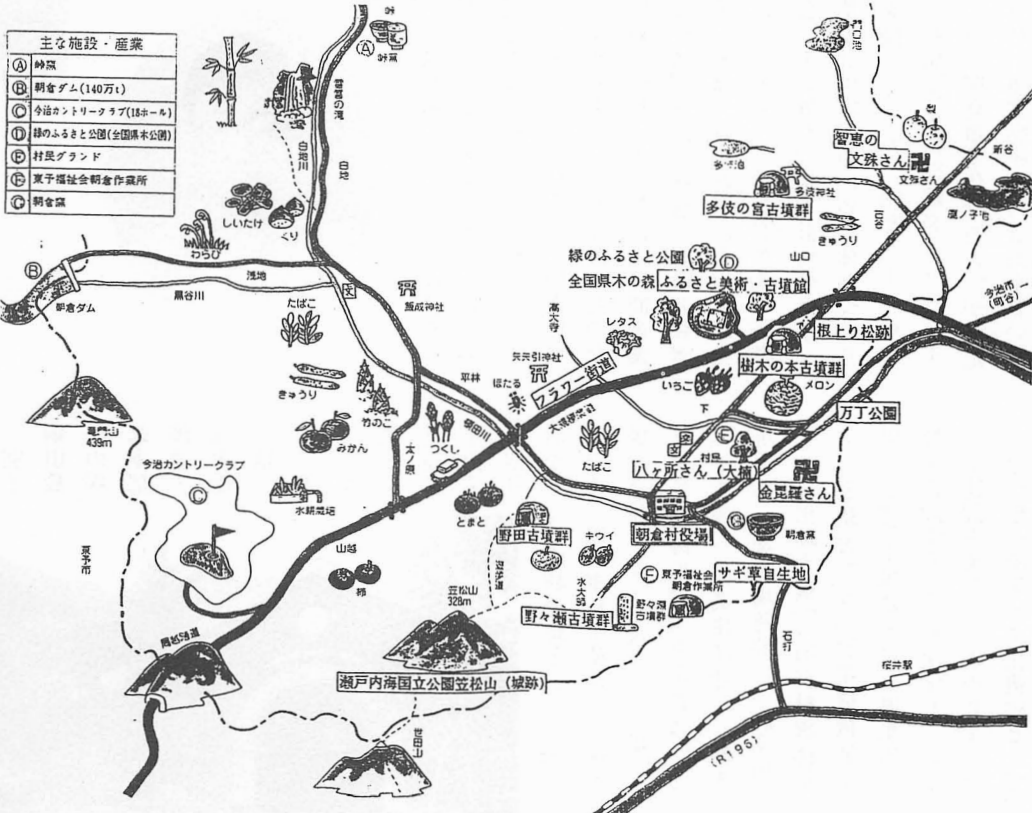
来島大橋が開通になると、県下でも最大級の古墳の里として、脚光を浴びると期待しています。

● 四季の草花の植栽など
 以上のような構想により、まちづくり、活性化へと知恵をしぼり実現へと向かってがんばりたいと思います。

- 古墳、歴史の分布図
- (二) 古墳群の解説板
- 出土した各古墳群の解説板
- (三) 歴史的な景観の香りを演出する装置
- 地形をうまく利用した自然公園の建設
- (わらぶき屋根の休憩所、古代の住居の復元、古墳の中へ入れるように整備)
- (四) 花の咲きみだれるプロムナード



史跡ゾーン整備事業基本構想図 - 2



別子銅山が 観光地として甦る

新居浜市役所

高橋 利光

■はじめに■
新居浜市は愛媛県の東部、燧灘に面したところにあり、人口十三万二千人の県下第二の都市です。別子銅山の開坑により、住友企業群を中心とした四国屈指の工業都

市へと発展しました。現在、潤いと活力にみちた産業・文化創造都市の建設を目指し、工業一辺倒の都市から大型鉱山観光施設「マイントピア別子」を核とした観光光面をも併せ持った都市へと進展しています。

■日本三大銅山のひとつ■

別子銅山は、元禄三年（一六九〇）人跡未踏の銅山峰で露頭が見られ、翌四年住友によって採掘が開始されたのが始まりです。元禄時代には、産銅量が世界最大であったと言われ、秋田の小坂銅山、栃木の足尾銅山とともに日本三大銅山のひとつにも数えられています。採掘環境・条件の悪化等により昭和四十八年（一九七三）に閉山し、現在の新居浜市及び住友グループの発展に大きく寄与した二百八十二年の偉大な歴史に終止符を打ちました。

■南部観光開発計画の策定■

新居浜市は、別子銅山跡の産

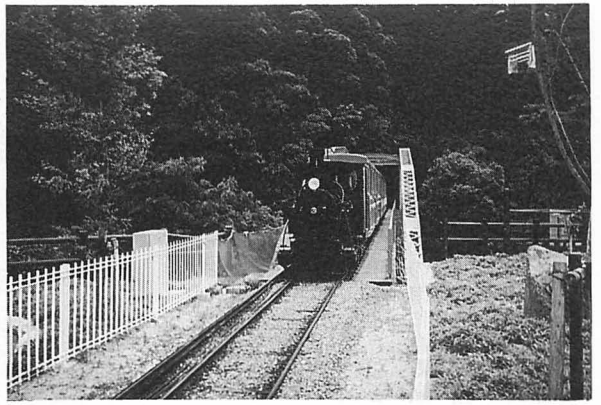


業・文化遺跡を活かした開発を推進するための調査研究及び計画を策定するため、庁内組織として昭和五十八年、「新居浜市観光開発調査研究委員会」を設置したのを始め、昭和六十二年には民間産業関係者、学識経験者、行政関係者等で組織する「新居浜市南部観光レクリエーション開発推進協議会」を設置し、基本計画の考察、基本計画実現のための体制づくりを図りました。昭和六十三年、「新居浜市南部観光レクリエーション開発事業化計画書」が策定され、事業開始への計画が整いました。

■産業・文化遺跡の活用■

別子銅山最後の採鉱本部跡地・端出場（はでば）地区の産業・文化遺跡を出来る限り活かした鉱山観光地として開発するため、鉱山事務所跡地に「端出場記念館」と「イベント広場」、下部鉄道跡地に「鉱山鉄道」と「下駅舎」、火薬庫跡地に「観光坑道」、旧選鉱場跡地に「駐車場」と「端出場大橋」、旧資材庫跡地に「上駅舎」と「産業機械展示場」、修理工場跡地に「遊歩道」等を建設することが決定し、いよいよ建設事業にとりかかりました。（その他の産業・文化遺跡として、第四通洞や大斜坑、旧発電所なども身近に見ることが出来ます）





鉱山鉄道



観光坑道内部

■第三セクターの設立

南部観光開発を推進するに当たり、地域経済に効果のある形に展開するため、第三セクター方式による開発が検討され、昭和六十三年「第三セクター設立準備委員会」を設置し、事業参加を各界に働きかけた結果、国の産業基盤整備基金をはじめとする二十三社の出資により、平成元年、第三セクター「株式会社マイントピア別子」を設立することが出来、観光開発の事業主体基盤が整いました。(マイントピアとは英語の「マイン」＝鉱山と「ユートピア」＝理想郷の合成語です)

■待望のオープンへ

新居浜市と株式会社マイントピア別子の事業の組み合わせにより南部観光開発(マイントピア別子開発)が開始され、平成二年の進入橋「端出場大橋」の完成を皮切りに、平成三年に総事業費約四十八億円の主要施設が完成、六月五日、記念すべき「マイントピア別子」オープンの日を迎えました。
☆マイントピア別子施設紹介

鉱山鉄道

明治二十六年に開通したわが国最初の鉱山鉄道を復元し、延長四百十メートルのレールの上をゆっくりとしたスピードで走ります。途中には、トンネル、鉄橋もあります。

観光坑道

火薬庫跡地を利用した坑道で、地底の中をマグシーバーの案内で鉱山の歴史を学習できる延長三百三十三メートルの神秘的な世界です。

端出場記念館

鉱山跡地をイメージ付ける明治調赤レンガを使用した四階建のビッグな建物で、中には、新居浜で湧出する天然鉱泉を利用した十三種類の温泉が揃った「ヘルシーランド別子」やレストラン、大食堂、お土産品売場等があり、また、時価一億円の大型石も展示しています。

■今後の進展計画

第二期計画として、更に山奥へ入った標高約七百八十メートルの採鉱本部跡地・東平(とうなる)

地区の観光開発計画を進めています。

恵まれた自然を活かし、鉄道敷跡やレンガ造の建物跡やトンネルなどの残された産業・文化遺跡を活用した歴史資料館やマイン工房の建設、トロッコ列車の復元を予定しており、また、端出場地区と東平地区を結ぶ導線として、ロープウェイ設置も検討しています。

■おわりに

瀬戸大橋の開通、高速道路の延伸、四国の大観光地金刀比羅宮と道後温泉の中間地点に位置する利点もあり、県内はもとより県外からの入り込み観光客が順調に伸び、オープン後一年を経過した時点で入場者数約七十五万人という県内でも有数の観光地となった今、本市の産業・文化遺跡の再生は大成功であったと確信しています。

「能島水軍の里」の まちづくり

宮窪町文化財保護審議委員長

高橋 万寿男

まちづくり

トル、面積約〇・二ヘクタールと
いずれも小さい無人島である。こ
こに能島水軍の根拠地として、応
永二十六年（一四一九）に村上氏
が能島、来島、因島の三家に分立
した頃築いたものだと思われる。
天正十二年（一五八五）豊臣秀吉
の四国征伐に伴い、廃墟となつて
から四百年余が経過した。

村上壺天子

能島水軍の全盛は南北朝時代か
ら戦国時代だが、なかなづく村上
武吉時代で、かつて朝日新聞の連
載小説「秀吉と武吉」で著者城山
三郎は「武吉は三島村上水軍を束
ねる総領家能島村上の主で、瀬戸
内海の制海権を握り、一時は西日
本の動向を左右しかねぬ力があつ
た」と書き出している。

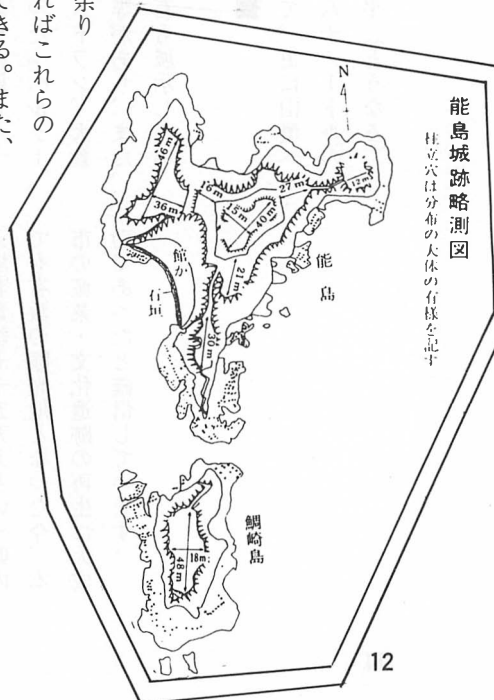
能島、鯛崎島を調べてみると能
島には本丸、二の丸、三の丸等の
跡が、鯛崎島には出丸の見張場的
な跡が残っている。このほか、船

がくし場、棧橋跡、
回廊跡かとも思え
る岩盤上の柱穴が、
能島に二百四十個、
鯛崎島に百二十個余り
あり、干潮ともなればこれらの
柱穴を見ることが出来る。また、
周囲の海峡は瀬戸の激流が渦巻き、
天然の要害を利用した典型的な海
域であつて瀬戸内海域中最大規模
の水軍遺跡であり、重要な史跡で
ある。

なお、能島に付属する遺跡とし
て東隣りの鵜島には水軍の「造船
所跡」と「船奉行屋敷跡」があり、
他にも「兵糧奉行屋敷跡」や「代
官屋敷跡」がある。また、燧灘よ
り宮窪水道への入り口、戸代鼻に
は長さ三十間余の水軍時代の「古
波止跡」があり、通行税や水先案
内料を徴収した場所だともいわれ
ている。

◆戦前の能島城跡保存と顕彰

伊予水軍中興の祖とされ、また



能島城跡略測図
柱穴は分布の大体の行様を記す

元弘建武の功臣たる能島村上五代
の当主村上義弘が、大正八年正五
位を追贈された。これ等に触発さ
れた村民有志によつて昭和十年頃
桜の植樹が始められ、昭和十四年
には「能島史跡保勝会」が結成さ
れ、城跡の調査研究、保存顕彰、
能島神社の建設、海事思想の普及
を目的としたが、戦争や敗戦の混
乱のため活動は停滞してしまつた。
戦後、昭和二十八年三月三十一日
国の「史跡」として指定され、昭
和四十八年六月十七日愛媛県より
「能島水軍の里」として指定を受
ける。県は、海上能島鯛崎見近島
鵜島南部を含む東西約三キロ、南
北約二キロの地域を指定し、以後

◆史跡概要

春は桜の名勝地ともなる能島城
跡は能島とその南にある鯛崎島の
二島からなる。能島の周囲は七百
二十メートル、面積約一・五ヘク
タール、鯛崎島周囲二百四十メー

宮窪町も国や県の補助金を得て、第一次、第二次の整備事業五ヶ年計画を進めることができた。

◆指定内地域の主な水軍遺跡

○国指定能島城跡（鯛崎島を含む）

○証明寺（能島村上氏菩提寺）跡

○幸賀屋敷跡（村上義弘居館跡）

○水軍資料館（資料五十六点）など。

「水軍の里」の種々イベント等と町民交流

○昭和五十一年〓水軍資料館開設展示

○昭和六十二年〓水軍夏祭花火大会

○昭和六十三年〓能島水軍太鼓の会結成

能島水軍弓道大会（全県）

○平成二年〓水軍夏祭（釣大



会）始まる。町外より八十名前夜祭より参加
国民文化祭に参加。
海上パレード。全国手漕船競争

漕船競争

○水軍早船「能島丸、武吉丸、景親丸」三艇による水軍レース（「景親丸」は本年進水）などが行われている。

以上筆者は水軍の里のまちづくりらしきことを追ってみた。しかし何か足りないことを感ずるようだ。行政も企業（本町地場産業の石材業者等）も商工会や各種団体、農漁民もよく協力はしてくれている。が、外面の華やかさに比べて、余り得にはなっていないようにある。町民のレクリエーションのみではいけないのである。町内の交流はよくなりつつあるが、町外からの能島への来訪者は年間一万人とまだまだ少ない。能島水軍の歴史や文化遺産を「ふる里づくり」「まちづくり」にどのような活かして役立てるか。

◆能島水軍の里まちづくりの夢

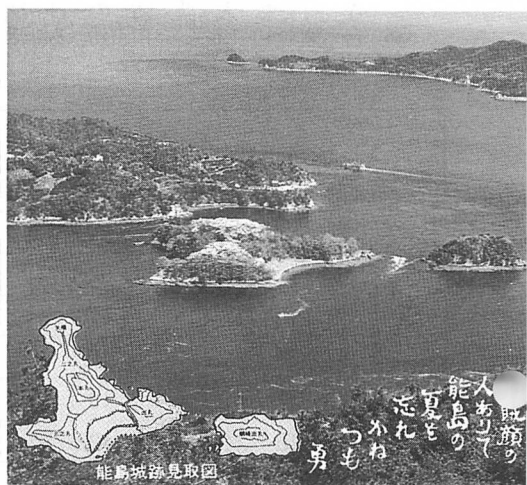
政治も文化もこれからは地方の時代であるといわれている。来年度使用予定の展示本、中社の歴史には「瀬戸内海の水軍」が初めて二頁も掲載され、南北朝時代の「海賊衆の活躍」も出ている。（学図）確か、浩宮皇太子殿下の学習院大卒論のテーマは「中世における瀬戸内海の海上運輸について」であったと思う。

徳仁親王殿下御歌（大三島橋）

鼻栗の瀬戸にかかりし橋望み

潮乗りこえし舟人偲ぶ

能島城跡の史的価値は益々高くなって来る筈である。今尾ルート of 全通を見通してのリゾート開発の拠点づくりや環境の保全や整備、



水軍に関連づけた種々商品の開発、三島五町の提携、共同研究の組織づくり等にもっと意欲的に取り組まなければならない。
また、能島の見える海岸に「水軍資料館」を移転して独立館とし、現在の能島水軍資料館五百十六点を中核とした全国の水軍資料をも収集して、「水軍歴史館」的なものはできないかと夢をみるのである。



過疎地域の再生について考える(Ⅰ)

過疎対策の問題点

松山大学経済学部長 村上 克美



近年、経済構造の激変のもとで東京一極集中が加速し、一方その対極と思われる地方、取り分け過疎の農山村は一段と厳しい状況にある。地域再編の時代とも言われる一九九十年代において、過疎地域再生の可能性はあるのだろうか。あるとすればその条件は何なのか、若干検討してみよう。

愛媛県では九十年に施行された新過疎法(過疎地域活性化特別措置法)によって、県内全市町村の五十九パーセントに相当する四十一町村が過疎地域に指定された。その後、弓削町、八幡浜市が追加公示され九十二年度の過疎地域は四十三市町村となった。町村では、約四分の三が過疎地域ということになる。八十五年～九十年の人口

減少率、高齢者比率とも全国平均を上回っており、愛媛県は相変わらず有数の過疎県に位置づけられるよう。

ところで旧過疎対策法(過疎地域対策緊急措置法)の施行(七十年)以来、二十年間の長期に渡って実施されてきた過疎対策は愛媛ではどのような成果をもたらしたのであろうか。町村の過疎地域活性化計画(九十年策定)における記述をみてみよう。「かなりの効果は上げているものの過疎の防止とまではなっていない」(上浦町)、「各種事業を実施してきたが人口減少の歯止め対策としての効果が思うように上がらなかった」(瀬戸町)、「全国で二番めに小さな自治体にまで過疎化が進んだ」(別

子山村)、「現在も過疎現象は依然として進行しているが、特に自然減が顕著になっており老年層の占める割合が増加してい

表 愛媛県における人口減少率(一九七〇～一九九〇年)の高い町村

	町村名	人口減少率 (1970 ～1990年)	国調人口	
			1970	1990
1	別子山村	66.8%	959	318
2	面河村	52.4	2384	1135
3	美川村	47.6	5383	2821
4	柳谷村	47.5	3183	1672
5	宮窪町	43.3	7296	4140
6	広田村	42.9	2172	1241
7	河辺村	42.7	2810	1611
8	魚島村	42.6	745	428
9	瀬戸町	38.4	5381	3316
10	関前村	36.6	1932	1225
11	三崎町	36.4	7779	4948
12	小田町	35.8	7002	4497
13	大三島町	33.5	8113	5396
14	新宮村	33.3	3567	2380
15	中島町	31.5	11837	8114
16	西海町	30.2	6046	4219

る」(魚島村)、「道路網の整備を中心に一定の成果を収めてきた。しかし、一方では若年層の流失に歯止めがかからず高齢化の進行する村となり地域の活力が著しく減退してきた」(新宮村)、「公共施設や生活、産業基盤の整備は人々の定住の基本条件である就業の場、雇用機会の増加にはあまり効果があがっていない」(西海町)、その他では、農林業の不振により経済

出所 国土庁『過疎対策の現況』(1991年度版) 1992年5月第2表より作成

基盤が弱体化したこと、中学・高校卒業者が殆ど定住しないこと、公共施設の維持費増により財政が圧迫されていることなどの指摘が注目される。また人口データ（七十～九十年）では、一時期増加に転じた町村（弓削町、宇和町、松野町、内海村、一本松町など）はあるが、二十年間の通算で見ると、全ての町村が減少している。しかも減少率が三十パーセントを越える町村も十六を数える。（表一参照）

こうした過疎地域の実態も考慮されて、新過疎法が成立することになった。新過疎法においては「人口の著しい減少に伴って地域社会における活力が低下し、生産機能及び生活環境の整備等が他の地域に比較して低位にある地域」について、その「活性化」を図ることが目的とされ、新たに市町村の創意、自主性、都道府県における広域的配慮、財政援助の対象となる事業の拡大など旧過疎法になかった工夫が若干なされている。とはいえ、人口と財力に関係す

る指標のみによる過疎地域の定義（指定基準）にしても、補助金と過疎債による財政援助の特別措置にしても従来のフレームを保存しており質的に異なるものではない。また従来と同様に過疎対策についての国の責務は「政策全般に渡り必要な施策を総合的に講ずる」とされるだけで、実行上の責任は不明確なままである。従って新過疎法も基本的には緊急対策として実施された、約二十年前の旧過疎対策法の焼き直し版と言えよう。現在も人口減に歯止めがかからず、若年層流失と高齢化のため農林業等の後継者が欠落し、集落崩壊も予想される過疎地域にとって、現行の過疎対策の効果は極めて疑わしいと言わざるを得ない。

こうして過疎対策の再生のためには、何よりもまず、これまでの過疎対策の問題点を明らかにしなければならぬ。主要なものを列挙しよう。問題点の第一は「人口施策としての過疎対策という視点からすると、大半の市町村が遅れている社会資本の整備に追われ、

真に人口施策として有効な事業の企画、立案、実施にまでは至らなかった」（島根県過疎地域対策協議会『これからの過疎対策』一九八八年、十三ページ）と言われるように、従来は人口の維持・増加そのものにこだわった施策や事業が不十分であった点である。市町村計画等では、当然に人口維持に目標が明示されるが、現実には、この目標をそれほど意識的にも、また意欲的にも追求されなかった。尚近年、「若者定住促進条例」（一本松町）、「山村振興対策褒賞条例」（別子山村）、「山村留学制度」（広田村）など人口増を目指した制度の創設が目立つようになった。

第二は過疎地域の基幹産業（農林業、地場産業等）の振興についての問題点である。即ち生活関連の施設整備と比較して、農林業等の振興策が不十分であったこと、基幹産業振興策においても基盤整備などハード面の施策が中心となり、ソフト面に関連する有効な施策が欠落していることなどが指摘出来よう。

第三は国民経済や国土政策における過疎地域の位置づけが基本的に明確にされていない（恒松制治「過疎対策の在り方」『地方議会人』一九九〇年五月号十四ページ、内藤正中『過疎問題と地方自治体』多賀出版一九九〇年、百八ページ）という点で最大の問題点と言えよう。周知のように、過疎地域の農山村や農林業は、地域住民はもとより都市部など非過疎地域の住民の生命や生活を守るために不可欠な機能（食料等供給機能、自然・国土保全機能、保健休養機能など）を果たしている。従って過疎地域の再生や活性化は国民にとっても重大な責務であり、国土政策の重要な課題となるはずである。こうした点をより明確にし、国民的合意を得ることが過疎対策の基本であろう。

「ふるさとづくりでもは残るか」

残せるか」

第十回逆手塾レポート

(財)愛媛県まちづくり総合センター

研究員 富 永 廣 次

平成四年六月十三日と十四日の二日間、広島県総領町で過疎地共通の悩みである「ふるさとに子どもは残るか残せるか」をテーマに『第十回逆手塾』が開催された。

広島県上下町から国道四三二号線を走って総領町内に入るとステルスで出来た草の葉のモニュメントが私たちを迎えてくれる。モニュメントは数キロおきに設置され、南から北に向かって行くにつれて一枚葉から二枚葉へと成長してゆき、庄原市に最も近いところでは花が咲いているのである。

また、商工会館も併設された「リストアステーション」では食事も取れ、賑わっていた。

六月十三日の午後、続々と会場へ入ってくる参加者達の表情は、

皆非常に明るく生き生きとして目を輝かせている。

受け付けを済ませ会場に入ると、そこには一種異様な雰囲気があった。参加者それぞれの発散するエネルギーによる物か或いは、町づくりに対する熱い思いの現れなのだろうか。

▼開会

最初に『過疎逆』の安藤周治会長の「過疎逆が十周年を迎える事が出来たのは、今まで参加してい



安藤周治さん

ただいた皆さんの力によるところが大きい。これからも、お互いがノウハウや知恵或いは技を交換しながら地域づくりに頑張りましょう」との挨拶で始まった。

和田芳治氏の「ふるさとセンター田総」は、サービスもしないが規制もしない。来た時より美しくとは言わない。来た時と同じにして下さい」との和田氏らしいオリエンテーションがあり、続いて宮崎文隆事務局長の日程説明があった。

そして、講師の藤原洋氏の紹介は、広島県新市町の平井悦夫氏により「大正末期に一度消えてしまった『たたら製鉄』の火を再び燃え上がらせるため八年前に地域の活性化に着手され、現在も『鉄の歴史村』で『鉄』をテーマに村づくりを実践されている」ということだった。

▼人づくりへの地域づくり

藤原氏は「今もなお過疎化は進み、状況が人口流出から自然減少へと変わってきた」

また、各地で進められている地

域づくりが進展しない理由を次のように言われる。「地域づくりの目的が明確にされていない」、現状の把握と目的がはっきりしていないということらしい。「二つ目は計画が深く掘り下げられていない」「三つ目に戦略的発想がない」ということである。戦略とは、「目標を達成していくための筋道を明かにすること」である。確かに、「目的は？」と、問われてはつきり応える事ができるだろうか。「やれる事からではなく、やらなければならない事からやっていくべき」とも。

「若者が地域に定住化しないのは、開かれた自由な空気がないからだ」そして「仕事がないから職場を作るのではなく、好まれる職場の開発へと発想を転換する必要がある」とも。

また、「行政にとっては、地域にいる人達が未来を感じる事が重要だし、未来が見えるサービスをしなければならぬ。そのためには、企画が必要になる。企画とは、現状を打破していく新たな目標を



作ることである」

「人づくりを考えるとき、先ずは自分づくりをしなければ人づくりは絶対にできない。そして、人を育てる環境を造る事が大切である。」

その環境とは、「文化事業で文化的空間を作り文化的時間を抽出

する事でできる」元行政マンらしからぬ柔らかな話の中には、藤原氏の自らの経験を元に緻密に計算された地域づくりが見えてくる。

「自分づくりは自己人格の形成は勿論の事、知識のネットワーク、いわゆる知的ネットワークの形成も重要な事だ」とも。

約二時間の講演であったが、誰もが静かに耳を傾け真剣な表情で聞入っていた。ついその話の流れの中に引き込まれて時間の経つのを忘れてしまう程であった。

▼人源スピーチ

今までの逆手塾に参加された方々が、今回のテーマである「ふるさとに子どもは残るか残せるか」と「夢」について話された。

▼人源が御馳走

香川県池田町の八木町長さんの分科会に参加させていただいた。

お話の中で、特に印象に残ったのは、「職員を旨く動かすのも町長の力量であるし、その力を見抜く目を持つのも町長の仕事だと思います」と言われた事だ。確かにそうであるかもしれない。実践者

だからこそ言える言葉だと思う。

▼総括

広島県立大学の徳野貞雄氏は、「地域づくりには、もつと高校生 の意見を探り入れたり、彼等を参加させなければならぬ。なぜなら地域が輝くか輝かないかは、彼等自身の選択にかかっているからです」と、今回のテーマの答が見えているような気がする。氏の舞台と黒板を一杯に使い、アクション



徳野貞雄さん

それがそれぞれの思いを持って参加されていることを、当然とは言いながらも肌で感じる事ができた。そして夜を明かして眠ることなく廊下で語り合っていた人達の姿を思うとき、自分の地域もこれくらい真剣に考えていかねばとも思う。今までは、何をどうすれば良いのかさえも分からない状態であったと思うのです。「逆手塾」に参加して、もつと自分自身と地域を見つめる事から始めなければと考え直させられた思いです。

興奮が冷め止まぬまま帰路にいたが、心の中を十分に満たしてくれるには有り余るエネルギーをいただいたような気がする。

地域づくり、そして自分づくりにこのエネルギーをぶつけていきたい。

ンを交えながら迫力ある総括で二日間の全日程を終了した。逆手塾では、お会いした人それ

自然を味方に

早川町のまちづくり

(財)愛媛県まちづくり総合センター

研究員 松岡正範

山梨県南巨摩郡早川町は、三キロメートルを超す雄大な南アルプスを西に望み、山懐に抱かれた町である。空は峰々に画され狭まり、

町の中央を貫流する早川の急流は、深い渓谷を形成する。

昭和三十一年、早川流域の六つの村が合併してスタートした早川町は、三百七十平方キロメートルという山梨県下最大の面積を有し、その中に平均戸数三十一・四十戸の三十六の集落が、山間を縫って点在する。厳しい自然条件のもと、山村の宿命ともいえる過疎化が進み、合併当時八千人の人口が、現在では二千三百人余まで減少している。

今回私たちは、七月二十一日から、早川町ほかのまちづくりの先進地域を訪ね、まちづくりの基本的な考え方などについて研修をさせていただきましたので、特に印象深かつ

た早川町のまちづくりについてご紹介いたします。

▼「自然の恵み 人のふれあい 南アルプス邑計画」

早川町のまちづくりは、「南アルプス邑・早川町」のネーミングにみられるように、南アルプスを背景とした生き方を基本としている。

「南アルプス邑計画」は、まず、県道の名称変更が始まる。町内を走る県道「野呂川―波高島線」を「南アルプス街道」の名称とした。この旨の、辻一幸早川町長の直訴に知事が折れ、愛称ということでは認められた。これを機に、山梨県下の県道に様々な愛称が付けられることとなったのである。さらに、

町の特産品に「南アルプス」の名称を付けるなどCI作戦を展開していった。

「過疎化は、町民の目を他所にばかり向けさせ、地域の持っている良さを考えようとするのがなかった。過疎克服は、まず自分達の足元に目を向け、一から地域を考える事からスタートしなければならぬ。南アルプスの厳しい自然は、生活していくには障害であり、恨めしい存在でさえあったが、これからは、むしろ貴重な財産として誇りとし、逆に活用していかねばならない。

地域の持っている個性を最大限に引き出し、それを個性あるまちづくりに結び付ける努力は、どこの市町村にあっても欠くことのできない地域おこしの条件だから」と辻町長は、取り組みの経緯について語られた。

こうした中、優れた山岳写真家の発掘、育成を目指し、白旗史朗賞日本山岳写真コンテストを開催するなど、全国に早川町が南アルプスの邑であるとの情報発信も

行っている。

▼旧村一拠点づくり

また、この「南アルプス邑計画」の中では、町が内蔵している資源・歴史・文化等を見直し、可能性の掘り起こしと活性化のための出来るだけの芽出しをしようと、「旧村一拠点づくり」が展開されている。早川町内には日本一の硯の石が産出される雨畑地区があり、日本の十大秘境にあげられる奈良田の里もあるが、これら旧村毎の個性を活かしながら、良い意味での旧村意識を呼び起こし、足元からの地域づくりをしていこうというもの。これは町域の広さがゆえの方策でもあり、各拠点（廃校を利用した宿泊施設などの各種施設）を中心に面的な広がりをもたせながら、早川町全体を活性化させるというものである。そしてこれら施設を運営・管理するために、財南アルプスふるさと活性化財団が、昭和六十三年に創設された。



辻 一幸 町長

南アルプス街道
NANALPUS STRAIGHT

早川町 初鹿田



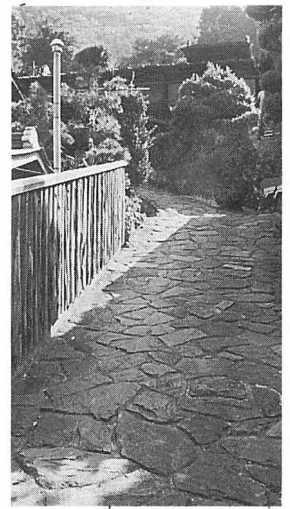
奈良田の里

財団は、従来の行政の枠内では、過疎に対抗したまちづくりは出来ないという判断から、本来民間が行うべき生産事業・収益事業にまでも取り組んでいこうというもの、イベント事業も併せ実施する機関として位置づけられている。これらの事業により、今や『早川町Ⅱ南アルプス』という感覚が住民意識の中で確立されている。「この十年間で、自分たちの地域の誇りの持てるところを掘り起こしてきた。全住民が地域を愛して暮らせるならば、この町はいい町になる。過疎は過疎でいい。たとえ人口が減ったとしてもかまわ

ない。地域を締めないことが大事である。山の中であるがゆえに、かえって、これからの町づくりが夢が持てる。磨けば磨くほど地域の可能性は出てくる」との辻町長の言葉が、早川町のまちづくりの方向を如実に表していた。

▼赤沢宿のまち並保存

行政主導で進められている早川町のまちづくりであるが、地域住民も振興協議会や運営協議会を通じて、積極的に参画している。その住民活動の代表的なものとして、「赤沢青年同協会」がある。赤沢地区は、日蓮宗総本山の身延山と、信仰の山七面山を結ぶ道の途中に位置し、講中宿として栄えたという歴史を持つ集落である。Uターンした若者を中心にして結成された「赤沢青年同協会」は、「自分たちでできる身近な活動」を合い言葉に、回覧板の復活、盆踊り、どんど焼きなどの行事の復活、危険箇所をチェックとその修復、「ふる里通信」の発行など、



赤沢宿の石畳

ふる里を元気にする活動を展開していった。さらに、石畳の整備も始めた。参拝者の通る集落内の主要な道路を石畳にしようというもので、今では町の長期計画にも組み入れられている。

この石畳の敷設が始まった頃、将来子どもが残るような環境づくりのためには、下水道が不可欠だということになり、下水道に関する勉強会を開始した。設置にあたって、各戸十数万円の負担金が必要であったが、同協会はすぐに地区住民の賛同をとりまとめてし



望月邦夫会長

まった。こうして完成した下水道は、対象人口の少なさ、急峻な地形にあるという点で特筆すべきものである。さらに、歴史のある町並みを残そうと、同協会が「景観形成住民協定」を提唱したときも、一晩のうち全戸の署名が集められた。建物の色や植栽に配慮する内容で、県も景観条例の第一号に認定している。「最初は酒を飲む会ぐらいに思われていた同協会だが、地道な活動が地区住民に認められ、信用を得るまでになった。今では、住民意識が高まり、同協会の方が押しきれ気味。今後は電線の埋設など、さらに修景事業をすすめていきたい」との望月邦夫会長の言葉には、ふる里が甦っていく確かな手応えが感じられた。厳しい自然条件を逆利用し、さらに地域毎の特色を前面に押し出しての早川町の町づくり、は時代を見る目と感性を大事にし、じつくり腰を据えた取り組みが行われていた。

見 管 スイスを歩いた二週間／見想録(Ⅰ)

【想いを深めた研修への期待】

宮本俊一

スイスを歩いてきた。生まれて初めての海外旅行。しかも語学ダメ男の旅だ。見聞と行きたいが：耳をもたない。せめて見たことを思い：、それを想いに熟したい。

なお、できれば視たことにしたかったが、生来の粗忽で迂闊が障りとなり、残念ながら漫然と眺めるに近く：見るにとどまった。

なぜスイスなのか：その年（十六歳）で二週間はスイスだけとは：。それも「地域づくりのベースを求めて：とは」この疑念は私にもあった。まずそれを述べる。

◇学びたい／スイス民主主義

『民主主義が人民による人民の統治を意味する限り、スイス以上に発展するものとは考えられない

英米民主主義との非常に違う点を指摘の上、スイス民主主義の凄さと実性を説いている。

「この言葉との出会いが「スイスへ行こう」と私を決心させた。フランスの経済学者であり、文明批評家であるシークフリード教授の言葉だそう。彼の著書には、『カナダ』『今日の合衆国』『今日のイギリス』『スイス』などがあり、各国見聞の上に立つ。

かつて私は、ガルブレイスの『不確実性の時代』で、この言葉と同じような意味の記述を読んだ記憶があり、確かめてみた。その『第十二章／民主主義・指導力・決断』で、『スイスの事例は、私にいつも、民主主義の力強さと効率のよさを信じさせるよすがとなってきた』と書出し、スイス民主主義の実態を具体的に述べ、

「ここで、敢えて一言添えると、『本物の地域づくりは、建前的な原理原則ではなく、スイスにみるような「住民に生活化された実際性民主主義」がベースだ』というの、私の確信的仮説なのだ。つまり、私のスイス行きは、私自身の決断ではあるが、参考に世界に知られた三つの国の学者の裏付けを参考としたものだ。

◇意識高い／東津野グループ

目標は方法を誤ると達せられない。

い。幸い私の「スイス行き」は、(株)西日本科学技術研究所（高知市）の福留所長をナビゲーターとする高知県東津野村十人（内女性二人）の若いグループに、同県生活改良事業の専門技術員（女性）と私の二人が飛び入り同行を願ったのだが、私にとっては二度と選べない適切な選択だった。

このグループは、過疎山村の東津野村（四十万十川の源流・四国カルストの村）が、「地域づくり」をかけ、例の一億円を投じて毎年「スイス研究」に派遣する計画の第二年目組で、メンバー一人ひとりの意識は極めて高く感じられた。加えて彼等は、福留所長による連続講座六回の事前研修を経ており問題把握も明快で実に頼もしい。

東津野村が『スイスに学ぶ』選択をしたのは、村の「生涯学習講座」の講師として、福留所長を招き、「スイスの過疎対策とランドシャフト再開発」の話が契機という。村の英断もさることながら、あの福留所長の迫力ある熱意が、彼等を通じ伝わってくる思いだっ

た。

◇近自然河川工法とランドシャフト

福留所長は、五十崎町シンポの会の亀岡世話人とともに、スイスがランドシャフト理念を具体的実践に拓いた：『近自然河川工法』を日本に初めて紹介。自らその研究と実践に挺身され、近年、建設省をして『多自然型川づくり』を進める契機をつくった方である。

私は、たまたま県の町づくり総合センターの創設期を勤めたおかげで、その当初からご兩人のお教えに接する機会が多く、知識としては、『近自然河川工法』をはじめ『ランドシャフトの理念』も多少理解できる状態にあった。

「参考／ランドシャフトの概念」

ここで余談ながら、文字づらで意味が判りそうな『近自然河川工法』は措き、『ランドシャフト』の概念を説明したい。もともと、私にはその能力はないが、信州大学の桜井義雄教授が、財団法人日

本地域開発センター機関紙『地域開発』三月号（特集／川の再生）のトップに解説されているので、抜粋させていただく。

ドイツ語に Landschaft、英語に Landscape と言う言葉がある。どちらも辞書をひけば、風景、景色となっているが、この言葉がドイツ（スイス）や米国において地域の環境保全や生態系の問題に関連して使われる場合には、単に対象となる場所のうわべの姿だけ指すのではなく『現在の（有り様）をつくり上げその背景となっている、自然的、社会的要素とそれはたらしの歴史的な積み上げ』がその言葉の中に含まれるとされている。

しかし、わが国にはこれまで、風景をそのような中味と一緒に見る習慣や姿勢はなかったから、日本語には適当な訳語がない。新しい概念を持つ訳語として、Landscape に対して「景域保全」（佐藤昌一九七二）、また Landscape ecology に対して「景相生

態学」（沼田真一九九一）という訳語を提唱されているが、その意図は、残念ながらまだ一般に受け入れられるに至っていない。

このことは決して言葉の普及の問題ではない。要は、「景觀」というものの重要性に対する社会の認識の問題である。

河川景觀に限らず、景觀というのは、それをつくっている土地の地形・地質・気候、それらに育まれてきた植物の社会や動物群衆さらにはこれらに手を加え、改変し利用してきた人間の所業と、その基調となつてくる社会の思想や品性までも映し出している。まことにゆるがせに出来ないものなのである。（後略）

◇私流／スイス研修コンセプト

東津野村のグループは、そうしたランドシャフトの理念を基に、四万十川の源流を「近自然河川工法」で守り、過疎を克服する『むらづくり』を研究するテーマにしたスイス研修旅行なのである。それは、五十崎の「川の運動」

を切り口に、『まちづくり』の実践を学ぼうとする：私にとり、ピッタリのテーマであるばかりか、極めて至難な近自然河川工法による「川づくり」は、地域の人達の生活感からの支えなくしては実施できないことなのだから、私が希う『住民生活化された実際性のスイス民主主義』を探るには、絶好の機会と勇躍参加したワケだ。

ともあれ、これでプロローグを終り、レポート本番を書くことになる。乞うご期待といたいが：力量不足。あらかじめ「想いと現実報告の格差」のご容赦をお願いしておく。



写真／ヨハンナ・スピリ著『ハイジ』の村を訪ね行く…。

天津の空の下で

北条市 新山 博彬

天津の空は高く大きい。コバルトブルーの空に突きささる様に真つ白な天津タワーがそびえる。タワー途中にある展望台はゆつくと三百六十度回転し、次々と新しい風景をプレゼントしてくれる。

周恩来首相を生んだ南開大学のキャンパスが、学生数一万を越す天津大学と競う様に眼下に拡がり、学都天津の風格がうかがえる。見渡す限り光り輝く緑と湖 そんな天津市を四月末～五月上旬にかけ、天津市衛生局、日中医薬交流協会の招きで訪問した。

目的は学術交流と学術講演会の実施；等。訪中団による学術講演会は天津市科技咨詢大厦（科学技術センター）で開かれた。

私に与えられたテーマは「地域医療における放射線技術」；胃集検追跡調査の結果から；。

私が地域保健医療の世界に入つて十八年、愛媛県下を這いつくばうようにして活動してきた。その活動の中から、胃がん検診の実施状況、発見胃がん者生存率追跡調査結果等、昭和五十年～平成元年の十五年間、延二十七万五千四百八十九人の受診結果をまとめたものである。

医療と言えば病院中心…の意識が多い中、県下の離島から山間僻地間で、出前持のように予防活動で走りまわるのは、俗に言う3K仕事の感がある。然し実際には条件の悪い僻地に行く程、活動の意義や人の心の温かさが感じられる。

まさに胃集診の仕事は、胃の中を診る以上に人の心の中を見て歩ける事で、人と人とのふれあい、心と心のふれあいの素晴らしさがある。私自身は、こんな素晴らしい仕事はないと信じているのだが、若い人達には街中の大病院でかつこよく；がいらしく、山間僻地を巡ること等、やはり3K仕事になつていようだ。

余談は別として、このような日本独特の保健活動を遠く中国で紹介できる機会を得るとはまさに感謝感激である。

中国では日本同様にがんの恐怖はあるものの、胃がんより肺がんの死亡率が高く、集検の例もないことから私の話が理解していたかどうか…と心配であった。

講演会の聴衆は天津市の医科大学学生や教育関係者。東洋医学と西洋医学が厳然と存在し、西医と東医の接点を探りつつ進展する中国。西洋医学については日本に比べ随分と遅れているようだが、講演を聴く人の熱気と眼光の鋭さに、話しをする我々が完全に圧倒され、

当初の心配は吹き飛んでしまった。人間の幸せを願ひ、医療の向上に対する彼等の考え方、態度、取り組みは純粹そのもの。中国人学生達のこの迫力は日本では感じることの出来ない異様なものであった。

中国医療の実態を目の当たりにして、日本医療の素晴らしさを改めて認識できたことも収穫であれば、純粹に真剣に医療に取り組む中国の人々の迫力に、日本医療の将来に、こころの問題としていささか寒気を覚えたのも事実である。

講演会が無事終了した安堵の中で、ふと我が故郷、愛媛の海や山、検診で接した多くの人々の明るい笑顔が脳裏を駆けぬけた。天津の空も美しいが、やはり日本の愛媛の空はもつと素晴らしい。またコツコツと地域保健の道走り続けよう…と天津の空につぶやき、心の中に確認したことである。

今回は主婦、母、女流画家として活躍の私の最も尊敬する門田真由美さんです。



カララの二人

広見町 菊澤 尋吉

二年前の六月、私はイタリアの北西部、大理石の産地カララで版画展を開いていた。彫刻家藤部吉人君の案内で忘れ難い人々に出遇い貴重な体験をすることが出来た。

ミケランジェロホテルというカララでは一流のホテルだったが、そこで綴った感想録をもう一度読みかえして、当時の感激を偲んでいる。

夢のような夜は過ぎた。アトリエ・カララは芸術を愛する人たちの渦だった。知らない人たちがつきつきに私を祝福してくれた。クリステイナ（アトリエ・カララの女性ディレクター）と美術評論家ジョルジョ・デイ・ジェノバが現れたとき、私はジェノバが来たと言う意識がなかった。彼は美男子でチェックの上着を着た下素晴らしいいでたちだった。彼は言った。「ことは通じないけれども

心で話そう」と。私もそう思った。その美男子がジェノバだったとは後で知った。批評を書いてもらったお礼を言う暇もなかった。

私は日本から来た若い女性から、ジェノバの批評の英文の訳を聞いた。彼女は中々むづかしいといつて概略を話してくれた。それは、東洋と西洋の関わりや、今の私に對するジェノバの率直な意見が書かれていたようだった。私はカンパリの入ったカクテルでジェノバと乾杯をした。オープニングパーティーはいつまでも続いた。

三時頃仕事場へヴァンジを尋ねた。ヴァンジは石煙につつまれながら白い小さな帽子をかぶりマスクをして、冷制作している男の像を仕上げているところだった。喰い入るようなデッサンが、新しいホルムの展開が私には感じられた。その大きな石像の前で私は

唯々慄然とした。

五時にヴァンジは仕事を終え私の絵を見に来てくれた。クリステイナと話していたが何も分らなかった。ヴァンジは時々私の絵の前で私に向かってやさしい瞳を送ってくれた。私はヴァンジの言葉が聞きたかったが何も分からなかった。だがヴァンジは熱心に見てくれた。そして、私の手を彼にあつく広い手で握ってくれた。私の胸はふくらみふるえていた。

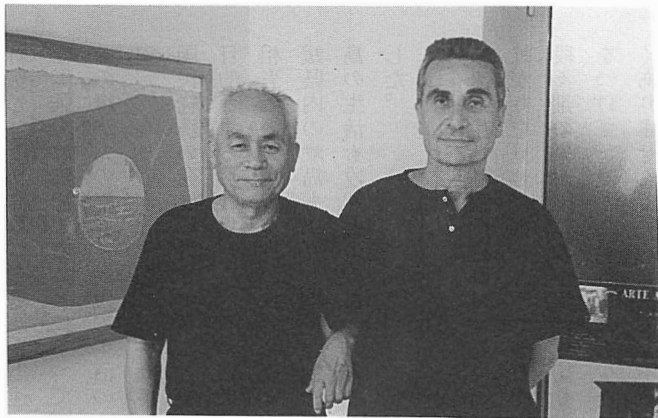
その夜、ホテルのレストランでヴァンジと又手を握った。藤部は私のこころをヴァンジに伝え、ヴァンジも自分のこころを私に伝えてくれた。

「私はあなたに遇ってうれしかった。けれども恥かしかった。ヴァンジの作品に触れて私の作品の未熟さを知った」と言ったらヴァンジは言った。「みんな同じだ坂道だ」と。多くをヴァンジは語らなかつた。あたたかい人間味と石のような魂だけが私には伝わった。

帰国後も今も、カララで遇った

この二人のことは忘れていない。又、いつか会える日があると思っている。

今回は、北宇和郡医師会会長で「赤黄につどう会」会長の森廉一郎氏にお願いします。



「離島振興法を考える」

愛媛県離島青年協議会

会長 井村 雄三郎



◀ 右が井村さん

元気印レポート

皆さんは愛媛県に幾つの「島」(有人島)があるかをご存じでしょうか? 私自身も最近になって答えられるようになりましたけど…。

愛媛県には百九十五の離島があり、そのうち三十五の島々に約五万八千人の人々が住んでいます。そして、それぞれの島では、今、高齢化問題と若者の流出による後継者不足等の深刻な問題を抱えつつ、その一方で、そこに生きる僅かな青年達を中心に、いろいろと新しい試みが行われているのも事実です。

私達「愛媛県離島青年協議会」(略して「離青協」と呼んでいる)は、そういった離島青年相互の親睦を深め、緊密な連携のもと郷土離島の振興対策を調査研究することにより、青年の実践活動を通じて離島の経済文化の発展と向上に寄与することを目的としている団体です。

この協議会の発足は昭和三十八年に遡る訳ですが、そのきっかけとなったのは、昭和二十八年七月

国によって制定された「離島振興法」でした。この法律は、本土より隔絶せる離島の特殊事情より来る後進性を除去するための基礎条件並びに産業振興に関する対策を樹立し、これに基づく事業を迅速かつ強力に実施することによって、その経済力の培養、島民の生活の安定、福祉の向上を図り、併せて国民経済の発展に寄与することを目的とするものでした。その結果、相当の公共投資が行われ、私達愛媛県内の離島も次々と指定を受け、島の生活も段々とよくなって来ました。

しかし、本土との経済的格差から来る生活基盤の遅れは、益々の拡がりを見せ、細々とした漁業や段々畑の果樹園での生活に見切りをつけて、島から離れる人も少なくありませんでした。そんな中、島の次代を担う若い力の必要性を重視した県は、昭和三十六年から離島問題を検討し、その結果離島青年の運動も年々と活発になって行くこととなりました。そして、昭和三十八年、県下各島の代表三

十五名によって「愛媛県離島青年協議会」の発足となった訳です。

現在では、各島の青年団や若者グループを中心として、それぞれのOBや全国離島青年会議出席者など、約二百名の会員（年齢制限なし）で組織され、運営は各地区からの代表二十名によって行われるようになっていきます。

さて、昭和二十八年に制定された「離島振興法」も、実は平成五年三月三十一日をもって終期を迎え、新しい離島振興法の制定が具体化しつつあります。それは、法制定以来各離島の社会資本整備はある程度進んで来ましたが、本土との経済的格差からくる生活基盤の遅れは依然として大きく、最初に述べたように高齢化問題や若者の流出による後継者不足によって地域の活力低下が顕著になってきているからです。

新しい離島振興の基本方策では、基本的な考え方として次のように明記されています。

「新しい時代に即応した離島の役割を明確化するとともに、

一、交通・通信体系の整備

二、産業の振興

三、医療・高齢者福祉の充実

四、教育・文化の充実

五、生活環境の整備等

に重点を置き、税制、金融、財政面に配慮する等、それぞれの地域が自らの主体的努力により離島振興、地域の活性化を図ることが出来るよう、その実現に必要な支援措置を行うものとする」と。

しかし、これだけで若者の流出は本当に止まるのでしょうか。離青協の先輩方も恐らくこの問題について激論を交わされた方もいる筈です。これからの離島問題を考える時、一時間圏内で移動することの出来る地方の中核都市を含んで、その周辺地域一体の総合的な長期計画も必要ではないでしょうか。

例えば、出雲市長の岩國さんがおっしゃっている大都市の大学減反による地方への誘致なども、周辺地域が一体となった広域的な取り組みとして出来る若者流出を防ぐ具体的な事例の一つでしょう。

元気印レポート

私達の親がそうであったように、いい大学に入って一部上場の企業に入る事が子供の幸せだと信じている親がいて、そして、それぞれの選択肢が大都市に集中し続ける限り、いかに離島の港湾設備や道路等の社会基盤が良くなるうとも、地方から都市への、人、モノ、カネの流出を防ぐことは不可能かも知れません。

でも僅かに残った若者たちは、いつの時代も潮風を浴び、土を握りしめ、お天道様に汗しながら、生まれ育った故郷（島）を守り続けていくのです。

自分のために、そして、家族のために。



離青協の大先輩
魚島の佐伯教育長を
囲んで
(魚島にて)

『野村町百姓百品まごころ市

ガンバッチョります』

野村町百姓百品まごころ市組合

惣川地区 代表 橋 本 艶 子



◆惣川市オープン◆

私たちが住んでいる惣川地区は四国カルスト大野ヶ原のふもとにあり準高冷地として位置付けられています。地区内の殆どが山林で、自然が野村町の中では最も豊富に残っており、自然浴にはピッタリの所です。

地区内の殆どの農家で野菜、山菜、花きを家庭菜園で作っておりそれらを何とか販売して少しでもヘソクリができないものかと思案の末、「産直をしよう」ということになりました。公民館が窓口、事務局になってもらい会員を募り最初四十名が集まり、会名を「惣川百姓百品健康ひろばの会」とし産直をスタートさせました。

第一回目の市を平成三年四月二十七日に町の中心地に開店し、旬の野菜、山菜を中心に各生産者が出品した軽トラック二台分の品は開店の一時間後には、目ぼしいものはすべて売切れで私たちはとてもビックリしました。

同じように消費者の方にも大変

ひいきにしてもらい、互いに満足出来るものでした。毎週土曜日の市が序々に定着し、会員も今では八十一名となり、平均年齢六十才以上で頑張っております。

◆農村に元気を

とりもどそう◆

惣川地区のユニークな取り組みに他の地区の皆さんも注目され、平成三年七月、全町組織「野村町百姓百品まごころ市組合」が結成されました。

「生産者が、消費者に新鮮で安く安全な農産物を供給。本物の農産物の味を知ってもらい、生産者は直接販売することにより経費を節約、生産性の向上を図る」とを目的にしていますが、経済効果はもとより、産直を通じて消費者と生産者の交流を図り、農村に新しい風を吹き込み、豊かで潤いのある農村社会の建設をめざして行きたいと思っています。

農村に元気をとりもどしたいという熱い思いを込めて……

◆やっぱり、生きがい

……です◆

産直を始めて、消費者の要望を直接聞くことが出来、低農薬、無農薬野菜、山菜等が特にうけているように思いました。セリの食べ方や使い方を直接指導したり、その要旨を品物と一緒につけることで売り上げも向上しました。

私たちが食べている田舎料理を町の人たちに食べてもらうことがとてもうれしく、励みになります。今後も良いものを作って行きたいと思っておりますので、皆さん、よろしく願います。

ところで、この会では値段を各自で決めるようになっており、同じ商品、数でも出品者によって値が違うので市に早くこられた方には目玉商品が手に入りますよ。

また、新鮮なので消費者の方は少しでも早く来ていただきたいと思っております。今後は、乾燥野菜（干し大根、ぜんまい、竹の子）や薬草の研究も行い、健康という

ことに着目してさらに良いものを作って行きたいと考えております。また、松山店では郷土出身者の方々に再会することもでき、昔話に花が咲きます。「また来てやな」の言葉があちこちで聞かれます。今後も新鮮野菜のコミュニケーションを作って行きたいです。

「やれば出来る、年寄りでもやれます。これが生きがい……」です。

皆さんも、思いついたらまず実行してみませんか、夢のような話でも実現出来る可能性は高いですよ……。

今、毎月第二、第四日曜日に、ひをグリーンハイツ、東鷹の子団地（松山市）で松山店を午前十時三十分より行っております。是非お寄り下さい。

元気印レポート



全国お手玉遊び 大会を開く 新居浜市

新居浜市では、四年前から、ボランティア団体を中心になって、お手玉の普及に取り組んでいます。学校、各種施設などへのお手玉訪問、各種イベント、公民館などでのお手玉教室、全国のお手玉展



などを行ってきました。昨年十月には、第一回新居浜お手玉遊び大会を開き、百五十人の市民が参加しました。

今年も、市制五十五周年に当たるのを機会に、全国お手玉遊び大会を開催します。先日スタートした大会実行委員会で、九月十九日、二十日の両日、山根総合体育館で行うことが決まりました。

大会は、団体戦、個人戦が予定

国定公園石鎚 名勝面河溪 面河村

九月二十三日、大自然をさらに満喫していたと名勝面河溪谷の五色河原で、水辺の景観を利用した「石鎚聖流郷まつり」が催されます。清らかに澄みきった五色河原に体長五センチメートル級のニジマスをはじめ、大小含めて

され、片手三個突き、両手四個突き、二人突き、ヨセ玉その他の種目が計画されています。

祖母から孫へと伝えられてきたお手玉遊びを普及させ、次の世代に残そうと、実行委員会では大会の準備に汗を流しています。

大会の資料請求は、新居浜市繁本町八一六十五(〒七九二)全国お手玉遊び大会実行委員会事務局へ。

四千尾を放流、釣開始の合図で一斉に竿を下ろす。このどよめく瞬間を一度ためしてみてください。

又、昔から石鎚山は日本の七霊山として信者が全国各地から訪れています。山々に響き渡る太鼓の音と共に、神の祈りを込めて石鎚山の天狗岳の名にあやかりまして「石鎚天狗太鼓」を創作しています。この日も若者が大太鼓、小太鼓とほら貝などで演出、その熱気溢れるひとときを御期待いただけます。



そのほか景品付きの宝拾い、遊歩道を散策し、森林欲を楽しみながら巨木名をあてる樹木クイズ等、田舎ならではのふるさとの味コーナー、また、おらが村の特産品の即売、人気を集めています。

参加された方は、きっとご満足されると思います。お待ちしております。

山の里からこんには
ひじかわイベント
松山広場
肱川町

肱川町の自然や人情・特産物を
松山市で紹介・交流を深めようと
町と松山地区肱川会が昭和六十三年より開催しているもので今年で
五回目となります。

松山市道後温泉入り口の「放生

5か所開催
フォトコンテスト

愛媛のいろいろな表情をあなたの感性でフレームに収めて応募してください。風景、名所、祭、スポーツ、人物、特産品……なんでも結構です。「これが愛媛だ!」と思う写真を応募してください。現在、県と県文化振興財団、県観光協会が主催する「いきいき愛

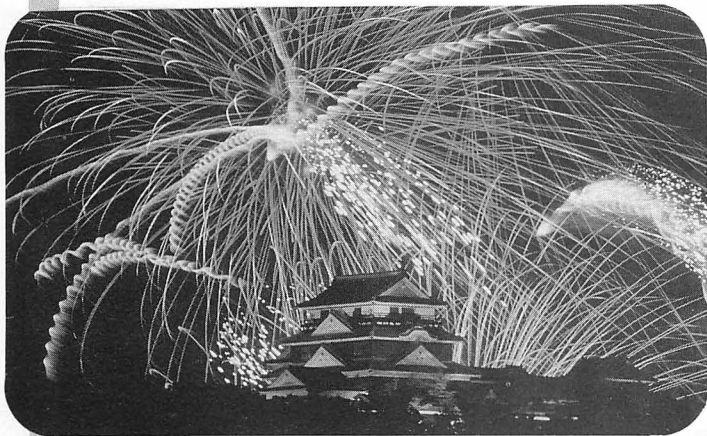
園」を会場として午前十一時より



媛フォトコンテスト」の作品を募集しています。募集期間は九月三十日までで、応募資格に制限はありません。

最優秀一点には賞状、賞金二十万円及び副賞が贈呈されるほか、優秀賞五点、入選五十点にもそれぞれ賞状、賞金及び副賞が贈呈されます。なお、これら優秀作品は

午後三時まで、肱川町の郷土芸能「風陣塵鼓」の披露、特産品コーナーでは栗や椎茸、新鮮な野菜を格安で販売するほか、アミノウオの塩焼き実演販売、清酒「風の里」のサービス、肱川の特産品が当たるクイズなどがあります。この他にもたくさんイベントを用意してお待ち致しております。ぜひ、「ひじかわイベント松山広場」にご家族おそろいでお越しください。



とき 平成四年九月二十三日
午前十一時～午後三時



十一月に開催される県民総合文化祭の期間中に県民文化会館に展示されるほか、県の広報用写真として広く活用されることとなっています。たくさんの方の応募をお待ちしています。

お問い合わせは、愛媛県カメラ商組合加盟の各店または愛媛県生活文化総室文化振興課（〇八九九一四五―二八五〇）まで。

TOWN タウン
パソコン通信ネットワーク

92年度 総会開催

Vol. 24

Human Communication & Network
ECCC
Ehime
Computer
Communication
Club

えひめコンピュータコミュニケーションクラブ

の運営をお願いすることになりました。

*ECCCの活動について

会員の方から、「TOWNタウン」とECCCとの関係がよくわからない、両者はイコールなのかと、よく質問されます。

「TOWNタウン」は、(財)愛媛県まちづくり総合センターとECCCとがそれぞれの目的のもとに共同で設立したもので、ネットの利用者はまちづくりセンターの関係者か、またはECCCの会員に限られます。したがって、現在、一般の方で当ネットを利用したい方はECCCの会員になる必要があるわけです。

ECCCはまた任意の団体であり、独自の活動も行なうようになっていきます。当ネットの運営はその活動の一環であり、それが活動の全てではありません。詳しくは入会時に送付していますECCCの会則をご覧ください。

「TOWNタウン」を運営しているECCCの総会が七月四日に行われました。出席者数は最近の「TOWNタウン」の利用状況を反映したかっこうになりましたが、熱意ある会員らの出席で、真剣な討議と、親睦を深め合うことが出来ました。

総会では、九十一年度決算報告並びに事業報告が了承されるとともに、本年度の事業計画、予算、役員改選案について討議され、了承されました。

◎事業計画について

(1)「TOWNタウン」の運営

①現在、未整備のままになっている当ネットの運営規則を定め、C

UGなど新たなサービスをはじめ。②将来のホスト・システム更新に備え、積立てを開始する。③愛媛県の地域づくりコミュニケーショングループとしての利用拡大を図る。

(2)パソコン通信の普及・広報

①引き続き、当紙面を通じて普及・

広報を行う。②各コーナー主催のイベントを支援し、会員相互の交流と親睦を深める。③パソコン通信に関する最新技術を学ぶための講習会を開催する。

◎予算については、昨年度とほぼ同様の内容となっています。

◎役員改選について、次表のとおり選任され、今後二年間ECCC



会長(理事長)

岡部秀明

事務局長(専務理事)

長尾文尊

事務局次長(理事)

柴田悟 松森陽太郎

理事

加藤真一 西山茂子 橋田直久

水関栄一郎 宮下博 宮武誠一

監事

岡本三廣 佐伯秀和

顧問

和泉信夫 兼築真理

松友武昭 渡邊智

お 知 ら せ

「まちづくり草の根文化講演会」の開催について

近年、全国各地で地域の活性化に向け、地域の自然を活用した特産品の開発、各種まちづくりイベントの開催、そして特産品センターの建設などハード・ソフト両面から様々な「まちづくり、むらおこし」事業の試みがなされています。

しかしながら、「まちづくり、むらおこし」活動を取りまく社会環境は、まちづくりの核となるテーマの選定、地域住民の意識の問題、活用資源など、検討・解決すべき問題が山積しているのも事実です。

そこで当センターでは、地域固有の歴史、生活文化に裏打ちされたまちづくり活動の原点を探り、個性的で独創的な活力と潤いのあるふるさとづくりを進めるため、まちづくり先進地の実践者等を招いて『まちづくり文化講演会』を次のとおり開催することといたしました。

つきましては、皆様お誘い合わせの上、奮ってご参加いただきますようご案内いたします。

■ **メインテーマ** 『“夢”“創造”“未来”魅力あるふるさとづくりを求めて』

■ **主 催** (助)愛媛県まちづくり総合センター、開催地市町村

■ **開催場所等**

◇東予地域

日 時 平成4年10月3日(土)
場 所 土居町 「土居町役場 大会議室」
講 師 藤原 洋 (助鉄の歴史村地域振興事業団専務理事)
連 絡 先 土居町役場企画財政課 (0896)74-3260

◇中予地域

日 時 平成4年11月20日(金)
場 所 小田町 「小田町林業センター」
講 師 交渉中
連 絡 先 小田町役場企画観光課 (0892)52-3111

◇南予地域

日 時 平成4年10月24日(土)
場 所 御荘町 「御荘町文化センター 大研修室」
講 師 高橋 寛治 長野県飯田市役所商業観光課課長補佐
連 絡 先 御荘町役場企画振興課 (0895)72-1111

※ 内容につきましては、若干の変更がある場合もあります。

愛媛県からのお知らせ

県では、7月7日から完全週休2日制を実施いたしました。

これに伴い、県庁と地方局など県の機関は7月第2週から毎週土曜日を閉庁しております。

また、県立病院も7月25日から毎月の第2・第4土曜日の外来診療を休診しています。(平成5年1月からは、毎週土曜日が休診になります。)

なお、生涯学習センター、健康増進センター、花き総合センター、図書館、美術館などの施設は、従来どおり業務を行っておりますので、詳しくはご利用になる施設へお問い合わせ下さい。

県では、事務処理を一層効率的に行い、皆様方にできるだけご不便をおかけすることのないよう努めて参りますので、今回の措置にご理解を頂き、今後とも県政の推進にご協力を賜りますようお願い致します。

お知らせ

財団法人愛媛県まちづくり総合センター

財団法人愛媛県まちづくり総合センターでは、愛媛県の7月7日からの週休2日制の実施に伴い、7月第3週から毎週日曜日及び土曜日を休日とする週休2日制を導入いたしました。

まちづくり情報の提供等で、皆様にご不便をおかけすることのないよう、なお一層の業務推進に努めて参りますので、ご理解をいただきますようお願い申し上げます。

カーブの多い山道を、奥へほとんど登っていきました。

河岸に降りると、透き通った水は、真夏とは思えないほど冷たくて、蟬の声と川の音と木々のざわめきに囲まれながら、余計に夏だなあと感じてしまうひとときでした。

内容についてのご意見や活動内容についての記事など、お気軽にお寄せください。

「舞たうん」編集係

二人のM.s.(毛利・安田)まで

〒七九〇 松山市三番町八丁目

一三四番地

愛媛県生活保健ビル三階

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

TEL

〇八九九(三三)七七五〇

FAX

〇八九九(三三)七七六〇

発行・平成四年八月十五日

(財)愛媛県まちづくり

総合センター

えひめ地域づくり研究会議